

ヒメキマダラヒカゲは森林性のチョウで、幼虫が食べるクマザサやチシマザサがある生息地にゆけばごく普通種のように複数頭が飛び交う光景を容易にみることができ、決して珍しいチョウにはみえないが、四国・九州で見られるのは標高 1000m以上の山地帯に限られる。古い図鑑には学名：*Harima callipteris* となっていて、昔の日本国名：播磨にちなんで命名されたいが、現在は *Zophoessa c.* となっていてその経緯と意味は知らない。蝶類図鑑には”近畿・中国地方では標高が 500m以下の低い場所でも見られる”という記載があつて、確かに現在の播磨ではそんなに高い山でなくても山地へと入れば出会える。それでも、加古川周辺のような低標高地で本種をみることはできない。その色調や斑紋は、ちょっと見ただけでは地味で華やかさもなく、このチョウを標本目的に採集する愛好家は多くないと思われる。しかし、ジャノメチョウ科のチョウすべてにあてはまるのだが、じっくりと眺めれば、裏面の眼状紋やその周囲はきわめて精緻にデザインされていて、はっとするほど美しいブルーまたはルリ色の鱗粉がちりばめられていることを知る。



そうした自然美を表現したいとカメラでねらうのだが、これがなかなか難しく、クジャクチョウの撮影目的で訪れた信州八千穂高原で、数少ないチャンスをとらえて数カットの記録をとってみた。

後翅のうすい黄色紋のなかに周囲に微妙なボカシの入った大きな黒い紋が美しく並んでいるのが残念ながらまだ十分に捉えきれていない。後翅裏面の芸術的な模様と色彩も満足のゆく記録とはできていなく、今後、入れ替えに足る撮影記録をねらいたい。

